

氏名	上 田 健 治
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	乙 第 135 号
学位授与の日付	昭和40年 9 月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 5 条第 2 項該当)
学位論文題目	急性肝炎時の胃幽門部十二指腸における機能的ならびに 器質的变化に関する研究 第 1 編 急性肝炎時の胃幽門部十二指腸における内庄曲 線について 第 2 編 急性肝炎時の十二指腸粘膜生検組織像について
論文審査委員	教授 小坂 淳夫 教授 平木 潔 教授 小川 勝士

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

肝疾患時の消化管の運動異常を検索するために、ゴム球法を用いて胃幽門部、十二指腸第 2 部の内庄曲線を描写、分析した。急性肝炎黄疸期には胃幽門部、十二指腸第 2 部共に運動時間は減少し、収縮波の平均波高にも上昇が認められる。又十二指腸では Type III 波の基礎圧の上昇がみられた。これらの変化は黄疸の消失と共に正常化した。慢性肝炎においては特記すべき変化が無い。しかし、慢性肝炎再燃例においては急性肝炎黄疸期と同様に運動時間の減少を認めたが、波高には有意の差を認めなかった。即ち肝炎急性期に胃、十二指腸の運動異常が起り、黄疸の消褪と共に正常化する事を認めた。

器質的变化を追求するために十二指腸第 3 部の粘膜生検を行い、組織学的観察を行うと共に、連続切片により立体的に粘膜を計測し、更に粘膜上皮細胞の細胞分裂指数及び構成細胞について数量的に検討を加えた。

急性肝炎黄疸期の絨毛は部分的に短小な絨毛を混じ、高さは減少し、これと並行して、細胞分裂指数の著しい低下を認める。絨毛上皮細胞の配列の不正、上皮細胞内リンパ球の増加、固有層のリンパ球、形質細胞の浸潤増加、杯細胞の増加、絨毛間の滲出性病変など、十二指腸粘膜に萎縮性、滲出性、炎症性の病変を認めた。急性肝炎回復期にはこれらの所見が消失して正常像に近づく事を認めた。

岡山医学会雑誌 第77巻第7号に掲載予定

論文審査の結果の要旨

上田健治提出の「急性肝炎時の胃幽門部，十二指腸における機能的ならびに器質的変化に関する研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は，次の通りである。

急性肝炎時の消化管の運動異状および粘膜像については，前者ではレ線学的検討以外にみるべきものがない。著者はこれらの点を明らかにするため，その経過を追って，運動については内圧曲線を描き，粘膜像については生検を行い，採取した組織像について検討している。その結果，胃幽門部，十二指腸第二部における内圧曲線では，急性肝炎黄疸期において運動時間は共に減少，平均波高は上昇，恢復期に入ると，ともに正常に復帰している。慢性肝炎の再燃期では急性肝炎のそれと同一所見で，各収縮波の収縮時間は各時期とも正常である。即ち急性肝炎黄疸期，慢性肝炎再燃期における上腹部膨満感の一因として以上の胃，十二指腸の運動低下を挙げている。次に十二指腸粘膜像では急性肝炎黄疸期において粘膜の萎縮性，滲出性炎症性病変をみとめ，恢復期では次第に正常化に近づくことをみとめている。

以上の通り本論文は新しい知見に富み，学術上有益であり，著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。